

1928年から1933年までの成城小学校における  
畑東一郎の体操改造に関する一考察

木原成一郎（広島大学）

A Study on the Reformation of Gymnastics in Physical Education by Toichiro Hata  
at the Seijo Elementary School from 1928 to 1933

Seiichiro Kihara (Hiroshima University)

Abstract

This study aims to clarify the feature of the idea that Toichiro Hata (1906-1999) planned and shaped about the reforming gymnastics in physical education classes at the Seijo elementary school. Especially this study deals with the documents that Hata wrote from 1928 to 1933 as a schoolteacher at the Seijo elementary school. Furthermore this study focuses on clarifying the extent to which the books of Kikuo Mihashi (1888-1969) influenced Toichiro Hata.

The results are summarised as follows :

- Hata set up the 'Sogo Undo (Combined Exercises)' as one of the groups of exercises in the table of gymnastics lessons that he published in 1930. Hata introduced the 'Sogo Undo' and his four viewpoints of reforming gymnastics in accordance with characteristics of the gymnastics in *The Systematic Critique on Syllabus of physical training for schools* (1926) published by Kikuo Mihashi et al. in 1926.
- In the table of gymnastics lessons that Hata published in 1930, he introduced many of exercises from *Modern School Gymnastics* published by Kikuo Mihashi in 1925.
- Hata was a pioneer in the introduction of rhythmical exercises and continuous exercises as teaching material to gymnastics at the Seijo elementary school.

## I. 本研究の目的と先行研究の検討

本研究の目的は、畑東一郎<sup>1)</sup> (1906-1999) が成城小学校に訓導として奉職した1928 (昭和3) 年から1933 (昭和8) 年までを対象に、彼が成城小学校の体操科において構想し具体化した体操改造論の特徴を明らかにすることにある。

1917 (大正6) 年に澤柳政太郎 (1865-1927) によって東京牛込に開設された成城小学校は、大正自由教育の拠点校として著名である。自由主義的体育の領域に限定すれば、成城小学校で1925 (大正14) 年から1927 (昭和2) 年まで訓導を勤めた島田正蔵 (1895-1960) の理論と実践が、岸野雄三<sup>2)</sup> や入江克己<sup>3)</sup> にとりあげられてきた。木原成一郎<sup>4)</sup> は、この島田正蔵の低学年の遊戯を中心とする研究をとりあげ、児童の自発的で能動的な活動を尊重する児童観への転換が学校体育の目標、内容、方法の理解を拡大させた事実を明らかにした。ただし、島田は低学年の楠組を対象に遊戯の教材編成や指導過程の開発を進めたため、体操や教練、競技などに関する教材の編成や指導過程の開発は課題として残されていた。島田正蔵の成城小学校での活動は2年余りにすぎないものであり、これらの課題の解決は、その後成城小学校で自由主義的体育をになった畑東一郎に残された。

1920年代後半から1930年代にかけての成城学園における体操研究に関しては、従来、小原国芳と三橋喜久雄の尽力でデンマーク人のニールス・ブック (Niels Bukh, 1880-1950) を日本に招聘した事実が注目されてきた。つまり、1931 (昭和6) 年9月のニールス・ブックの来日と彼らによる「基本体操 (Primitif Gymnastike)」の実演が、姿勢を重んじ躍動感の少ない「学校体操教授要目」(1926 (大正15) 年)の体操への批判と反省を促す契機となったというのである。<sup>5)</sup> ただし、ニールス・ブックの「基本体操」の紹介を始めた体操改造の研究が、成城小学校の体操科の内容に与えた影響は十分に検討されていないと思われる。<sup>6)</sup>

畑は体操科の運動を「遊技」(「遊戯」「競技」「舞踊」)、「体操」「教練」に区分し、それぞれの

運動の特質に基づいた教材の編成を行うことを主張した。<sup>7)</sup> 木原成一郎<sup>8)</sup> は、この畑東一郎の体操科改造論を島田正蔵の遊戯研究の成果の継承の有無という点から検討し、「遊戯」の教材配当が成城小の子どもに実施した遊戯意識の調査に基づいている点を畑の主体性と評価した。しかし、畑が指摘した運動の特質論や彼が実際に配当した運動は、「遊戯」と「競技」「舞踊」「教練」に関する限り島田の成果の継承にとどまったとした。ただし、畑の「体操」改造論と「体操」に配当した運動は、島田の残した遺産ではなく、三橋やニールス・ブックの影響を受け彼が新たに展開したものであるとし、その影響を受けた点を次のように結論づけた。まず、1930年に畑の提案した体操「改造の視点」が、同年に翻訳出版された『ニールス・ブック基本体操』の特徴と一致していることである。次に、畑が独自の考えから構成したとする体操「教材の配当案」(1930年7月)は三橋が1925年に著した『現代の学校体操』の影響を強く受けていることである。

しかし、畑が三橋の仲介で1928年に成城小に赴任したこと、三橋が1923年から1924年の欧米留学でニールス・ブックに直接師事していたことからすれば、運動の構成のみならず「改造の視点」に関しても1930年のニールス・ブックの来日以前に三橋から影響を受けていたことが推察される。畑の体操改造論の特徴を明らかにするためには、畑がどのような体操研究の成果を基盤にして新たな体操改造を展開したのかを明らかにする必要がある。そのために、畑が三橋から受けた影響を再検討する作業が課題として残されているのである。

そこで本研究では、畑東一郎の体操改造論の特徴を明らかにするという目的のために、運動を構成して学年に配当する教材編成の問題を中心に、畑が三橋から受けた影響を検討することを中心的な課題とした。

三橋は『現代の学校体操』を著した翌1926年に永井道明とともに『新体操教授要目の組織的批判』を出版している。大熊廣明<sup>9)</sup> によれば、

この著書は、1926年に改正された学校体操教授要目の批判という形で、三橋の考える体操体系を『現代の学校体操』より詳細かつ全面的に展開したものとされている。本研究は、木原成一郎<sup>10)</sup>が用いていない『新体操教授要目の組織的批判』を資料とすることで、畑の体操改造論への三橋の影響を再検討することを意図した。

畑によれば、1928年に成城小学校の体育部の計画は、「体育方面（積極的鍛錬的）」と「衛生方面（消極的）」を含んでいた。その「体育方面（積極的鍛錬的）」には、正課としての体操科以外に、行事として「朝会体操」「運動会」「遠足」「夏期学校及び冬季の学校」、課外活動として「放課後の運動」があった。成城小学校では体育を保健（「衛生方面」）を含んだ学校教育全体にわたる領域として計画していたのである。畑は、その中でも自ら体育主任として担当した「朝会体操」を、「学習の根柢人生の根源としてのエネルギーの培養及学校愛の精神を涵養」する機会と考えていた。<sup>11)</sup>ただし、本研究が畑東一郎の体操科における体操改造を検討の対象としているため、このような行事や課外活動さらに「衛生方面」に関する畑の見解はここでは扱わないことにした。<sup>12)</sup>

畑の成城小学校での体育に関する研究成果は、彼が成城小学校に赴任した1928年3月から成城小学校を退職する1933年9月まで、おもに『教育問題研究・全人』誌に掲載された。<sup>13)</sup>そこで、本稿では『教育問題研究・全人』誌に掲載された畑の緒論を中心的な資料として用いることとする。<sup>14)</sup>

## II. 畑東一郎における体操改造の視点

### 1. 体操の特質の理解

畑東一郎は、成城小学校赴任後5ヶ月目に教育問題研究誌への最初の論稿「成城小学校体育の実際」を発表した。この論稿では体操に関する教材の構成や配当という具体的な提案は行われず、遊戯や体操、教練などの特質とそれぞれの関係の整理が展開されている。

畑は、まず「児童の凡ての学習は皆プレーを通して行われなければならない。ことに遊戯が身体的表現の形をとって現れる事を考える時に特に体育が児童の遊戯を出発点としなければならないことを痛感する。」<sup>15)</sup>と述べ、遊戯を中心とする子どもの生活と学校教育の内容を連続的に構成する新教育の立場から、体育での遊戯の重視を宣言する。ただし、遊戯を出発点と考えた場合、「自然そのままの姿である児童の遊戯は、児童の全我活動としての遊戯であるからそれを其の俣伸ばして行って將して将来我々の考える体育にまで到達し得るかは疑問である」<sup>16)</sup>という。

そこで、畑は次のように述べて体操科として体操を指導する意義を確認する。

体育に於ける遊戯が児童の内部的欲求の身体的表現である以上身体各部の完全な發育という事をぬきにして考えることはできない。

随ってこの意味から体操が重要な体育の一部面を担当することになるのである。<sup>17)</sup>

体操は、「身体各部の完全な發育」に貢献するという特質により体操科で用いられるのである。体操は、「児童の全我活動としての遊戯」が、「身体各部の完全な發育」を伴い「将来我々の考える体育にまで到達し得る」ために必要なものである。つまり、畑によって遊戯と体操の関係は、「具体的表れである遊戯から次第に体操へと規制され進化していかねばならない」<sup>18)</sup>ものと考えられている。遊戯と体操の特質を踏まえながら、体操科の目的達成のために遊戯と体操の果たす役割を区別する発想は、体操を「科学を根底にした体育の反省的体育運動」<sup>19)</sup>とする「反省」の用語の使用や、「遊戯のルールの如きも子供自身に構成せしめたい」とする遊戯の指導過程の提案にみられるように、島田正蔵による体操の特質の理解や遊戯研究の成果を継承したものと思われる。<sup>20)</sup>

さらに、畑は、「身体を分解し部分を練習することをのみ考えてこれを人間の有機的総合的關係に結び付ける事の出来なかつた過去の体操をおいそれと無条件に取り入れる事は出来ない。」

21) と述べ、体操そのものの改造に歩をすすめることになる。

## 2. 体操改造の視点の提案

畑は、成城小赴任後2年余りたった1930(昭和5)年2月、「学校体育の改善」と題する論稿を『教育問題研究・全人』誌に発表した。この論稿で、畑は遠足や課外指導を含めた学校体育全般の改善点を指摘すると同時に、「学校体操に関する謬見」として「従来の体操」を批判する形で体操改造の観点として以下の4点を初めて示した。<sup>22)</sup>

第1は体操にもっと総合的な取り扱いを多くしなければならないと云う事である。…第2は不断の生活日常の活動の中に多く見出し得る運動法をもっと重視しなければならないと云う事である。…第3は調律的な運動、リズムカルな運動をもっと多く取り入れなければならないと云う事である。…第4は身体の機能的方面を重視しなければならないと云う事である。<sup>23)</sup>

各項目は以下のように具体例をあげて説明されている。<sup>24)</sup> 第1項目の「総合的な取り扱い」は、これまでの体操が人間の動きを足の運動、手の運動という各部分に区分して考えてきたことを批判して生まれきた主張とされる。特に、胸、背、腹、体側とつながっている躯幹部の運動を、従来のように胸の運動や背の運動に切り離さずに一連の運動と考えて運動を構成し指導することが提案されている。

第2項目では、従来の体操が、「不断の生活、日常の活動」の中に多くある遊びなどの動きとあまりにかけ離れていたことを批判している。具体例として、「行進」や「駈足」を教練だけで用いることは残念であること、体操の「跳躍」、「懸垂」運動に、木登りや崖下り、川跳び越しなどの遊びを用いることが示されている。

第3項目では、従来の体操の堅苦しさに「生氣」を与えるとともに、全身の機能を増進するという生理的効果が期待されている。ここでは、「下肢の運動」に、ホップ、ステップ等の

リズムカルな運動を付け加えることと躯幹部の運動に振動的な運動を加えることが提案されている。

第4項目は、従来の体操が、運動の身体への生理的効果を基準として作られながら、いまだ「身体の生理的機能」へ十分着目出来ていないことが批判されている。ここでは、同じ上肢の運動でも、動きの大小、動きの硬さ柔らかさ、動きの静と動等のすべてに向かって訓練が行われて初めて完全な上肢の発達が見られるとされる。また、「躯幹部」にもっと大きな動きと柔らかな動きを取り入れることが提案されている。

畑東一郎は、これらの体操改造の視点を考えるにあたり何をよりどころとしたのであろうか。そのことを明らかにするために、畑の4つの視点と畑の成城小学校への奉職を仲介した三橋喜久雄の体操論を比較する。<sup>25)</sup>

三橋喜久雄は、畑の論稿の発表される4年前、1926年に永井道明と共著で『新体操教授要目の組織的批判』を著した。三橋は、時代の要求に応じるために「我が学校体操を一層向上さすべき主要なる事項」として次の5点を示した。<sup>26)</sup>

1. 部分的の運動と総合的の運動とを各々一層深く多くせねばならぬ。
2. 体操に於ける機能的実質を重視して教材を組織構成せねばならぬ。
3. 児童学生の心理発達の系統階段に一致せねばならぬ。
4. 体操を児童学生の生命の全体のものとして進めねばならぬ。
5. 筋肉の働き方を最も合理的にせねばならぬ。(傍点は原文)

まず、畑の示した第1の観点にある「総合」という用語を含む三橋の第1の事項の説明は以下のように述べる。

吾人の身体構成を総合的一体のものとして有機的全体のものとして総合的運動組織の範囲を広くせねばならぬ…自然に総合的運動が出来てくると云うような立場ではなくて、始

めから部分的運動と並べて総合的運動は必ず体操の組織構造の上から明瞭に成立させることが必要である。<sup>27)</sup>

そして、同書の運動分類は、7つの運動からなる「部分的運動」と6つの運動からなる「総合的運動」、5つの運動からなる「全身運動」で構成されている。さらに「総合的運動」は「1. 四肢の運動、2. 胸及背の運動、3. 胸及腹の運動、4. 腹及背の運動、5. 軀幹諸部の運動、6. 四肢及軀幹の運動」で構成されている。<sup>28)</sup> 畑の示した第1項目の「総合」は、軀幹部の運動を一連の運動として構成した三橋の「総合的運動」に学んだことは明らかである。

つぎに、三橋により「部分的運動」のひとつとされた「下肢の運動」の説明をみると、必要とする「運動構成上の条件」の筆頭に次の条件がかかっている。「1. 日常の動作、不断の活動に於て多く見出し得る運動法。例えば『足踏』・『行進』等の如きである。」<sup>29)</sup> この三橋の「日常の動作、不断の活動」という表現が畑の第2の観点にある「不断の生活、日常の活動」に対応していることが注目される。同時に、日常の動作として「行進」を「下肢の運動」に含めるという提案は、畑の示した観点の第2項目にある「行進」や「駈足」を教練だけで用いることは残念であるという主張と一致している。さらに、三橋が「跳躍運動から「駈歩」を除去したことは何と云っても一番大なる欠陥ではないか<sup>30)</sup> とする点も畑の見解と一致している。ただし、三橋により「跳躍運動」と「懸垂支持挙上運動」に配当されている運動には、木登りや崖下り、川跳び越しなどの遊びは取り上げられていなかった。<sup>31)</sup> 子どもの遊びを体操の教材に用いる畑の発想は、三橋の著書にはみられないものであった。

また、三橋による「下肢の運動」の「運動構成上の条件」の第2項目は、次のようになっている。「2. 慣性的にも而も調律的に運動を構成すること。例えば『駈歩足踏』・『ホップ屈膝拳股』等の如き。」<sup>32)</sup> これは、畑の第3の観点の例にある「下肢の運動」にホップ、ステップ等

のリズミカルな運動を付け加えることと対応している。畑の示した第3の観点と三橋の著書との対応を調べるため、三橋の著書の「総合的運動」の「軀幹諸部の運動」を検討した。<sup>33)</sup> すると、「軀幹諸部の運動」に含まれる10個の運動の内、上体を振動させる体の捻転を含んだ運動は8個である。これは、軀幹部の運動に振動的な運動を加えるという畑の第3の観点の例と符号していると思われる。

最後に、畑が示した第4の視点にある「身体の機能的方面の重視」は、三橋の事項の第2点「体操に於ける機能的実質」と体操の「機能」に注目する点で符合している。三橋は、「同形態の中に機能的差異を認めると共に又機能を重視する時には従って形態組織の上にも変更別異を企図せねばならぬこととなる」<sup>34)</sup> と述べ、運動の形態的特長ではなく、運動の生理的効果を分類の基準とすることを強調している。畑は第4の観点で問題ある例として、軀幹部の運動に動的運動や柔らかな運動が少なかったことをあげた。三橋の著書では、前段落で指摘したように「軀幹諸部の運動」の10個中8個が体の捻転という動的で柔軟性を養う運動であった。畑の示した第4の観点も三橋の著書の内容に学んだ点が多いと思われる。

これらの検討から、畑東一郎が1930年2月に発表した体操改造の観点は、三橋喜久雄が1926年に永井道明と共に発表した共著の内容に影響を受けて考えられたものであったといえる。それでは、この畑の4項目にわたる視点によって改造された体操は、どのような運動から構成されていたのだろうか。

### Ⅲ. 体操改造の具体的提案

畑は、この体操の改造の視点を発表した5ヵ月後、「成城に於ける体操の教材」を『教育問題研究・全人』に発表する。ここではそこに掲載された「教材の配当案」(表1参照)を資料として、畑の示した4項目の視点がどのように体操の運動の構成や配当に具体化されたのかを検討する。なお、「今年第1回体育部に於て定

表1:「教材の配当案」(第1学期のみ)

第 一 學 期

學年 種目	1	2	3	4	5	6
下肢	足行 踏進歩 駢	舉踵半屈膝 (臂支持)	舉踵半屈膝 舉踵屈膝 (臂支持)	脚前舉 ○脚及體ノ屈伸	屈膝脚側(前)出 脚側出舉踵半屈膝	
上肢	片臂廻旋 臂交互上後振	臂上伸 ○肩ノ上下	臂前伸 ○肩ノ廻旋 臂前側振動	臂前屈 ○臂前上前側廻 旋	○臂側開 ○臂交互上前側 廻旋	○臂交互前側上 伸
頸			頸前(後)屈 手腰、手胸手 後組、安座	○臂側開頸側轉		
胸		掌外反胸後屈 臂體側開脚 (直立)	○臂側上振動胸 後屈	體支持胸後屈 開脚 直立幫助	胸後屈 (臂上舉)	臂支持胸後屈
懸垂		懸垂直立屈臂 舉踵 (助木)	○懸垂直立伸臂 屈膝	○片手片脚支持 體側向懸垂	懸垂 (助木)	懸垂屈膝舉股 (肋木)
平均	丸木渡り	舉踵半屈膝	屈膝舉股	除歩 脚側舉	片脚屈膝片脚後 舉體前倒 (手胸・臂上舉)	
體側		體側轉 手頭 [安座 開脚開足]	體側轉 (臂側舉開脚)	片臂側上舉體側屈 (開脚) 體側倒(屈臂開脚)	體側屈 片手頭 片脚支持 片手上	臂側開體側轉
腹				○仰臥舉脚 ○仰臥舉脚體 起前下屈	體後屈 (脚支持開脚)	體後倒 臂體側手胸脚前出 脚支持體後屈 手胸脚前出
脊		體前倒 手胸 [開脚 直立]	體前下屈 (臂上舉開脚)	體前倒 (屈臂開脚直立)	片脚屈膝片脚 後出 體前倒(屈臂)	體前倒 (臂上舉)
跳躍	片脚跳 駢歩 両脚跳 駢歩足踏	上方跳 ○臂側振開脚跳	臂前振上方跳 ○小繩跳	側向上方跳 ○大繩跳	跳下 臂前振前進跳 ○大繩二本跳	○前後開脚跳
轉廻				前方轉廻 (臂立)	臂側轉	○後方轉廻
綜合	○駢歩足踏肩上 下及指屈伸	○駢歩足踏臂前 上側下	○駢歩臂前上側 下	○脚側出舉踵臂前 下伸 ○舉踵半屈膝臂側舉	○脚側出舉踵臂前 屈側開 ○膝舉股臂側開 ○足踏臂側開	○舉踵半(全)屈 膝臂側上舉
教練	氣を付け、休め 整列、解散 整頓(縦隊)		伍ノ重複及分解	横隊行進 駢歩間後向	駢歩ヨリ速歩	側面縦隊ヨリ 横隊
遊技	整列競争、旗取り 源平球入 鬼ごっこ	○狩人 陣取り(其ノ一) 對列フットボール	○巴鬼 ○入取り ○十歩がくれ ○ボテトレース	○追跡探 ○捕獲探 ○鴨狩 ○陣取 ○角力 ○スポンヂ ○ボール投げ	長距離走 バスケットボール ハンドボール バレーボール プレ グランド ボール プレ グランド ボール	バレーボール
呼吸	臂側舉	臂側舉舉踵	胸後屈	臂側上舉	○體後屈及前下振動	

(出典：畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930(昭和5)年、7月1日、pp103-105)

めた本校に於ける今年度の教材系統案である」<sup>35)</sup>とあるところから、この「教材の配当案」は、畑のみならず成城小学校全体の教師間で合意になったものと思われる。

さて、「教材の配当案」を作るにはどのような課題があるであろうか。そこには、教材としてどのような運動を構成し選択するのかという運動の構成の課題と、それらの運動をどのように分類して各学年へ配当するのかという運動の配当の課題がある。

## 1. 体操の分類基準

最初に後者の運動の分類と配当の課題について検討する。表2は、畑の「教材の配当案」の運動の分類である「種目」を1926年に改正された「学校体操教授要目」の体操の分類と比べたものである。

表2：体操の分類区分の比較

学校体操教授要目 (1926年)	「教材の配当案」 (1930年)
1. 下肢ノ運動	1. 下肢
2. 頸ノ運動	2. 上肢
3. 上肢ノ運動	3. 頸
4. 胸ノ運動	4. 胸
5. 懸垂運動	5. 懸垂
6. 平均運動	6. 平均
7. 体側ノ運動	7. 体側
8. 腹ノ運動	8. 腹
9. 背ノ運動	9. 背
10. 跳躍運動	10. 跳躍
11. 倒立及転回運動	11. 転回
12. 呼吸運動	12. 総合
	13. 教練
	14. 遊技
	15. 呼吸

(出典：畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930年、7月1日、pp.110-121。及び教育史編纂会『明治以降教育制度発達史 第8巻』教育資料調査会、1964年、pp.808-827.)

畑の「教材の配当案」の分類を学校体操教授要目の分類と比べると、まず、畑の区分に「13、教練」と「14、遊技」があり体操と他の運動が並列されていること、次に「総合」という新たな体操の分類区分がたてられていること、さらに「頸」と「上肢」の順序が逆になっていること、最後に「11、転回」で「倒立」が分類名からおちていることがわかる。

「倒立」が分類名から落ちているのは、「11、転回」として配当されている体操に「倒立」の運動が含まれていないからである。「頸」と「上肢」の順序が逆になっている理由は何も記されていない。

このように両者に若干の相違はあるが、畑自身がこの配当表について「設備の許す限り要目をその仮適用する事に定めた」<sup>36)</sup>と述べていることからすると、「総合」という分類を設定したことを除き、「学校体操教授要目」の体操の分類を畑が大体において採用したといえるであろう。

## 2. 体操における運動構成の基準

次に、畑が「教材の配当案」(表1参照)で提案したこれらの運動が構成された基準はどのようなものであったかを検討する。畑は、この「教材の配当案」にある○印のついた運動を彼の「改革意見の取り入れられている」箇所と述べている。これらの運動は、先に述べた運動の構成という課題に彼が応えた結果である。

表1は、1学期のみを掲げたが本文には2学期と3学期の配当表も掲載されている。この3つの学期の「教材の配当案」には、体操の中で○印のついた運動が68個(体操全体の約4分の1にあたる)ある。特に新設された「総合運動」には○が集中し、「総合運動」の25個中24個の運動に○がついている。先に述べた畑の体操改造の視点の第1に、「総合的な取り扱い」があることを踏まえると、この「教材の配当案」では、「総合運動」に含まれる○印のついた運動が畑の改革意見を端的に示していると考えられる。<sup>37)</sup> なお、この「総合運動」という名称は、

前章で検討した1926年の三橋らの著書で発表された「総合的運動」を畑が導入したものと考えられる。

さらに、この「教材の配当案」が掲載されていた「成城に於ける体操の教材」という論稿には、この配当案に続いて、「独自の立場から選定し構成した教材」のなかから、代表的なものとして25個の運動が選ばれて、図入りで運動の仕方が説明されている。この25個の運動のうち17個(68%)は、畑のこの論稿の書かれた5年前の1925年に三橋喜久雄が出版した『現代の学校体操』に掲載されているものと同じである。

それでは、その「独自の立場から選定し構成した教材」の中から畑の改革意見を端的に示したと考えられる「総合運動」をとりあげて検討する。図入りで運動の仕方が説明された「総合運動」は5つあるが、『現代の学校体操』にも掲載されている運動は次の4つである。なお( )

内の運動名は、三橋喜久雄著『現代の学校体操』に記された名称である。<sup>38)</sup>

- 1 「駆歩足踏臂前上側下」(「駆歩足踏及臂前(側)上側(前)下」)
- 2 「行進及臂側開」(「屈膝挙股及臂左右開」)
- 3 「四肢の屈伸体後屈」(「四肢ノ振動屈伸上体後屈」)
- 4 「スキップ体捻転」(「スキップ体捻転」)<sup>39)</sup>

次の図1はこの4つの運動の図であるが、左が畑の示した運動であり、右が『現代の学校体操』から抜粋した運動である。この図に見られるように、畑は運動そのものにとどまらず、説明のための図も三橋の『現代の学校体操』から引用していた。

三橋の著書にあるこれら4つの運動の「目的性質」をまとめたものが次の表3である。<sup>40)</sup>

これらの運動の「目的性質」をみると、2、3、4の運動は、「下肢上肢共ニ其ノ屈伸ノ挙動ヲ同ジクシテ屈曲及ビ伸展ノ其ノ気ヲ全体的ニ統

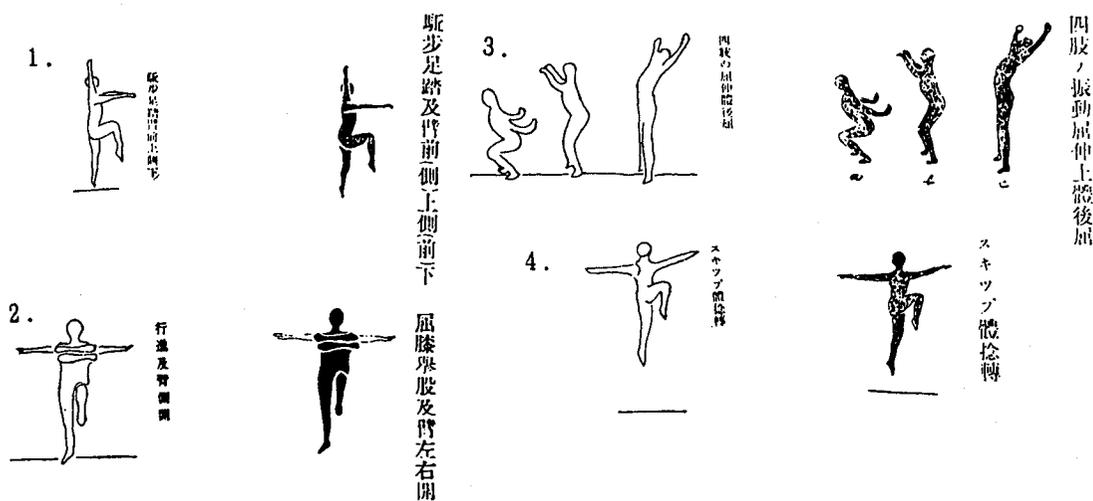


図1 畑東一郎の「総合運動」の図(左)と三橋喜久雄の体操の図(右)

(出典：畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930(昭和5)年、7月1日、pp.117-119. 三橋喜久雄『現代の学校体操』モナス、1925(大正14)年、p.47, p.50, p.149, p.153)

表3：「総合運動」の「目的性質」

<p>1. 「駆歩足踏及臂前 (側)上側(前)下」</p>	<p>1)「下肢各関節ノ最モ自由ナル屈伸ト共ニ肩関節ノ各方向ニ円滑ナル動作ヲ伴ハスコト」 2)「全身的生理機能ヲ促進シ又ハ整理スルニ極メテ適切ナモノデアル」 3)「上肢下肢共ニ調律的ニ一致的動作ヲ以テ機能的發現ヲ味ワウトコロニ心身一体ノ活動境ヲ楽シク創リ進ムコトガ出来ル」</p>
<p>2. 「屈膝拳股及臂左右開」</p>	<p>1)「下肢各関節ノ最モ自由ナル屈伸ト共ニ肩及肘関節ノ屈伸ヲ練習スル」 2)「下肢上肢共ニ其ノ屈伸ノ挙動ヲ同ジクシテ屈曲及ビ伸展ノ其ノ気ヲ全体的ニ統一シテ各挙動ニ於テ其ノ全力的努力ヲ促スニ極メテ好適デアル」 3)「心身発揚ノ準備ニモ統制一体ノ整理ニモ適切ナルモノデアル」</p>
<p>3. 「四肢ノ振動屈伸 上体後屈」</p>	<p>1)「上肢ハ主トシテ肩関節ヲ軸トシテ振動廻旋ヲ下肢ハ関節ヲ弾性的ニ屈伸シテ以テ全身ノ伸展ノ準備ノ基礎ヲ作ル」 2)「上下肢ノ屈伸振動ニ伴ウ全身ノ調和的ナ円滑ナル運動ヲ練習スル」 3)「上肢ノ伸展及ビ廻旋ト下肢ノ伸展トニ依リテ上体後屈ヲ最モ円滑有効ニナス」 4)「激シキ運動ノ準備並ニ整理トシテ全身血液循環ヲ整理促進シ呼吸ヲ調整スル」</p>
<p>4. 「スキップ体捻転」</p>	<p>1)「スキップノ練習後其跳躍的進行中ニ体ノ捻転ヲ練習シテ全身ノ円滑軽快ナル動作裡ニ発揚的ノ表現ヲナス」 2)「スキップ中ノ屈膝拳股ト体捻転ニ伴フ頭ノ転回及ビ両臂ノ伸展ノ方向ガ体捻転ヲ有効ニシ全身的ノ跳躍的表現ヲ最モヨク發現スル」</p>

(出典：三橋喜久雄『現代の学校体操』モナス、1925年、p.47, p.50, p.149, p.153.)

一シ」(2の2)、「全身ノ調和的ナ円滑ナル運動」(3の2)、「全身ノ円滑軽快ナル動作」(4の1)とあるように、上肢下肢と駆幹部全体の「総合的な取り扱い」という先の体操改造の第1の視点から構成し選択された運動である。また、1や4の運動は「調律的ニ一致的動作ヲ以テ機能的發現ヲ味ワウ」(1の3)「全身的ノ跳躍的表現ヲ最モヨク發現スル」(4の2)とあるように、畑による体操改造の第3の視点であった「調律的な運動、リズムカルな運動」に基づいて構成し選択された運動である。さらに1の運動は、その「目的性質」に「全身的生理機能ヲ促進シ又整理スルニ極メテ適切ナモノデアル」(1の

2)とあるように、体操改造の第4項目の「身体の生理的機能」に着目して構成され選択された運動であると考えられる。<sup>41)</sup>

畑の示した「教材の配当案」の○のついた運動の中で代表的と思われる運動を検討することで、畑が独自の考えから構成したとする体操は、具体的な運動の仕方を含めて三橋喜久雄が1925年に著した『現代の学校体操』の影響を強く受けていたと指摘することができる。

#### IV. おわりに

畑東一郎が成城小学校で構想し具体化した体操改造論の特徴は、次のようにまとめられる。

1. 畑が1930年に示した体操の改造の視点及び同年彼が発表した「教材の配当」に設けられた「総合運動」は、三橋喜久雄が永井道明と1926年に出版した『新体操教授要目の組織的批判』の「総合的運動」に強く影響を受けて作られたものであった。

2. 1930年に発表された「教材の配当案」の中で、畑が独自に構成したとする運動の多数は、三橋喜久雄が1925年に出版した『現代の学校体操』から導入されたものであった。

3. 畑は「総合運動」という運動分類を設け、ホップなどの律動的でリズムカルな運動や躯幹を中心に連続的に四肢を動かす運動を成城小学校の体操に持ち込んだ。これは、畑東一郎の体操改造の構想と具体化が島田正蔵の遊戯研究の遺産を継承したにとどまらず、三橋の影響のもと新たな展開をみせた成果といえる。

謝辞：成城小学校関係の資料の収集にあたり、成城学園の恩田裕氏、成城教育研究所の青柳恵介氏には大変お世話になりました。また畑東一郎氏からは貴重な証言を聞かせていただくことが出来ました。ここに感謝の意を記してお礼の言葉に代えさせていただきます。

## 引用および注

1) 畑東一郎は、1906(明治39)年兵庫県に生まれ、1924(大正13)年3月鳥取県師範学校を卒業後、同年4月から鳥取県で小学校訓導となり、1926年1月以降の鳥取師範学校訓導を経て、1928年3月成城小学校に訓導として赴任した。筆者が1992年12月に成城教育研究所で行った畑東一郎氏御本人からの聞き取りによれば、畑東一郎の成城小への赴任は、新体操の研究のために欧米に3年間滞在し1924年に帰国した三橋喜久雄(1888-1969)の仲介によるものということであった。その後、彼は、1933年9月、「成城学園紛擾」を機に成城小学校を辞職した。成城小を去った後、畑東一郎は、東京の公立小学校教諭、東京市教育局体育課体育指導主事、福島県の小

学校兼青年学校長、中島飛行機荻窪工場の研修課長を歴任し、戦後は公立中学校教諭となり中学校長として定年退職を迎えた。1999年7月22日没。

2) 岸野雄三他『近代日本学校体育史』東洋館出版社、1959年、pp.127-128.

3) 入江克己『大正自由体育の研究』不昧堂、1993年、pp.78-87. 入江克己「日本近代体育の思想と実践(9)」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第29巻第2号、1987年、pp.147-148.

4) 木原成一郎「大正末から昭和初期にかけての成城小学校における体育教育の改造—島田正蔵の低学年教育を中心に—」『広島大学学校教育学部紀要 第I部』第15巻、1993年、pp.53-65. 木原成一郎「成城小学校における体育の改造」稲葉宏雄編『教育方法学の再構築』あゆみ出版、1995年、pp.312-332. 木原成一郎「1920年代後半の成城小学校における島田正蔵の『遊戯による教育』に関する一考察」『体育史研究』14号、1997年、pp.30-42.

5) 橋本道「体育」小原国芳編『日本新教育百年史』玉川大学出版、1970年、p.410. ニールス・ブックの日本への招聘の経緯とその実現に三橋喜久雄が中心的な役割を果たしたことは、次の研究で実証されている。恩田裕「三橋義雄の体育観」『成城法学「教養論集」』第10号、1993年、pp.84-89.

6) 大川信行は、ニールス・ブックの基本体操が、「テルングレン的要目体操」であった『学校体操教授要目』(1926年)への不満や批判を増幅させたと指摘している。ただし大川によれば、第2次改正『学校体操教授要目』には、ブックの基本体操はとりあげられる可能性は少なかったとされている。大川は成城小学校に基本体操が及ぼした影響に関しては特に検討していない。大川信行「『昭和11年改正学校体操教授要目』に見られる新体操の影響—小学校の場合—」『日本体育大学紀要』14巻2号、1985年、pp.9-19を参

照した。

- 7) 「学校体操教授要目」(1926年公布)では「体操科ノ教材ヲ体操、教練、遊戯及競技トス但シ男子ノ師範学校、中学校及男子ノ実業学校ニ在リテハ剣道及ビ柔道ヲ加フルコトヲ得」(教育史編纂会『明治以降教育制度発達史 第8巻』教育資料調査会、1964年、p.807.)とされている。ここでは「体操」や「遊戯」等の運動領域を「体操科の教材」と呼んでいる。これに対し、「体操の教材」(畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930年、7月1日、p.102.)という場合は、「体操」という運動領域を構成する下位の個々の運動、例えば「下肢」という「種目」に配当された「拳踵半屈膝」や「脚前拳」(表1参照)等を教材と呼ぶことになる。中内敏夫によれば、教材は「目標と子どもをつなぐ媒体」(中内敏夫『新版教材と教具の理論』あゆみ出版、1990年、p.26.)と定義される。前者の場合は、体操科という教科の目標と子どもをつなぐ媒体という意味で「体操」という運動領域が教材と呼ばれている。後者では、「体操」という運動領域に含まれる内容の「下肢」と子どもをつなぐ媒体として、「拳踵半屈膝」や「脚前拳」等の個々の運動を教材と呼んでいると解釈できる。ただし、本研究では教材という用語の示す意味が混乱することを避けるため、教材を後者の意味、つまり「体操」という運動領域を構成する「拳踵半屈膝」や「脚前拳」等の下位の個々の運動の意味で用いることとする。
- 8) 木原成一郎「大正末から昭和初期にかけての成城小学校における体育教育の改造(2)―畑東一郎による体操科教材の改造を中心に―」『広島大学学校教育学部紀要 第I部』第16巻、1994年、pp.57-70.
- 9) 大熊廣明「三橋喜久雄の体育論(Ⅲ)」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第26巻、1984年、pp.99-100.
- 10) 木原成一郎「大正末から昭和初期にかけての成城小学校における体育教育の改造(2)―畑東一郎による体操科教材の改造を中心に―」『広島大学学校教育学部紀要 第I部』第16巻、1994年、pp.57-70.
- 11) 畑東一郎「成城小学校体育の実際」『教育問題研究・全人』第25号、1928年8月15日、pp.147-152.
- 12) また、畑は「体育に対する正しき理解と、深き思想をもたしめるという事は趣味的の涵養と相俟って永久に体育的生活を営為する重大なる条件である」と述べて、体育史と生理学、解剖学に関する知識の理解が必要であるとする(畑東一郎「体育改革論」『教育問題研究・全人』臨時号、第52号、1930年10月、pp.279-280.)。ただしこの体育史と生理学、解剖学に関する知識の理解に関しては、授業で用いる教材が示されず、実際に成城小学校で授業を行った事実を示す資料も発見することができなかったため、本稿では検討することができなかった。
- 13) 1920(大正9)年4月、成城小学校の職員とその主旨に賛同する者によって「教育問題研究会」が結成され、その機関誌として雑誌『教育問題研究』が発刊された。この会の目的は会則第一条に「主として小学教育に関する諸般の問題を根本的に研究する」とことと述べられている。創刊号の「本雑誌の特色」欄には「日本教育ことに初等教育の根本改造、これが私どもの旗印です、而て、理論を基礎として科学的に哲学的に論ずると同時に、当校にて実際経験調査せる事実を根拠として研究せんとすること。これが雑誌の特色です。」と記されている。『教育問題研究』は、1928年3月の96号まで発刊され、その後は『教育問題研究・全人』に誌名を変更し1933年9月まで刊行された。(北村和夫『大正期成城小学校における学校改造の理念と実践』成城学園澤柳政太郎研究会、1977年、p.36、p146.)
- 14) 成城小学校在任中、畑東一郎は三橋喜久雄が1931(昭和6)年に創刊した『新体育』にも多くの論稿を発表している。しかしながら、『新体育』掲載の論稿は、「体育教材論

(1)「体育教材論(2)」と「体育教材論(3)」をのぞき、『教育問題研究』に掲載された論稿と内容が全く同一である(図2参照)。さらに『新体育』の論稿は、「学校体育の実際的基礎」と「体育教材論(4)」を除き、すべて『教育問題研究』の論稿よりも遅れて掲載

されている(図2参照)。そこで、「学校体育の改善」を引用するときのみ、「体育教材論(1)」と「体育教材論(2)」、「体育教材論(3)」を参照し、それ以外の論稿は、すべて初出の『教育問題研究』誌に掲載された論稿のみを引用することとする。

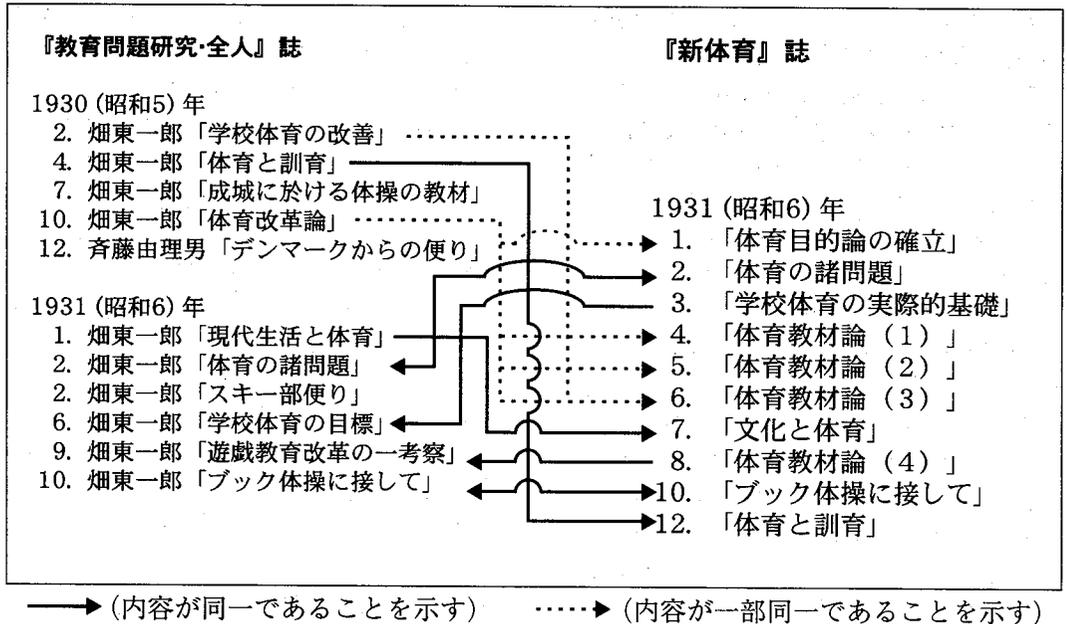


図2 畑東一郎の論稿の『教育問題研究・全人』誌と『新体育』誌の対応図

- 15) 畑東一郎「成城小学校体育の実際」『教育問題研究・全人』第25号、1928年8月15日、p.140.
- 16) 同上。
- 17) 同上書、p.141.
- 18) 同上書、p.140.
- 19) 同上。
- 20) 島田正蔵は、体操の特質を「人体の發育増進と身体の健康保全」を目的とした「反省的意味」をもつ「科学的体育運動」と捉えていた(島田正蔵「体育の根本問題(3)」『教育問題研究』67号、1925年10月、p.51.)。この点については木原成一郎「成城小学校における体

育の改造」稲葉宏雄編『教育方法学の再構築』あゆみ出版、1995年、p.317.を参照されたい。また、島田正蔵が子ども自身の合議によるルール創造という遊戯の指導過程を提案していた点は、同書、p.327.及び木原成一郎「1920年代後半の成城小学校における島田正蔵の『遊戯による教育』に関する一考察」『体育史研究』14号、1997年、p.38.を参照されたい。この畑の論稿が収められている『教育問題研究・全人』の巻末に成城体育部名で掲載されている「推薦遊戯」が、畑氏本人への聞き取りで、島田正蔵氏の成果であろうと述べられていたことから、島田正蔵に

- よる遊戯研究のこの時期の畑への影響は大きいと思われる。
- 21) 畑東一郎「成城小学校体育の実際」『教育問題研究・全人』第25号、1928年8月15日、p.141.
- 22) 畑東一郎「学校体育の改善」『教育問題研究・全人』第43号、1930年、2月、pp.74-76. 畑は、この体操改造の視点を「従来の体操に飽き足りない点」としている。「従来の体操」とは、この論稿の発表される4年前の1926(大正15)年に改正された「学校体操教授要目」の体操をさしていると思われる。
- 23) なお、畑の体操改造の視点は、畑が8ヵ月後の同年10月に『教育問題研究・全人』に発表した「体育改革論」では、この4つの項目に「第5は体操と芸術就中音楽とが握手しなければならぬという事である。」(傍点は原文)という第5項目が付け加わっている。この第5項目は、「音楽的リズム」と体操を結び付けることの提言である。具体的な例として、「ダルクローズのリトミックに刺激されて音楽的リズムと体操との融合点を見出し、これによって体操を芸術化しようと試みた新しい一つのシステム」である「ボーデのリズム体操」があげられている。また、彼が成城小で提案したリズムカルな運動を連続させて総合した体操を、何かの音楽に合わせて実施すればよいと述べられている。ただし次の引用によると、この視点により改造された体操は、いまだ成城小学校で指導されるにいたっていなかったと思われる。「あの体操(畑が指導している成城小学校の朝会体操のこと:引用者)にしても次第にかかる体育的舞踊に結び付けて、曲をレコードに吹き込み、これに合わせて全員が赤裸々な姿となって魂の底から接触するという、芸術的雰囲気をもつ機を至るのを待っているのである。」(畑東一郎「体育改革論」『教育問題研究・全人』第52号、1930年、10月、p.285.)
- 24) 畑東一郎「学校体育の改善」『教育問題研究・全人』第43号、1930年、2月、pp.74-76.
- 25) ここでは、畑の論稿の発表される4年前の1926年に永井道明・三橋喜久雄共著で出版された『新体操教授要目の組織的批判』を検討の対象とした。大熊廣明によれば、この著書で初めて6種類の「総合的運動」が発表されたとされている。また大熊によれば、ここで「我が学校体操を一層向上さすべき主要なる事項」として示された5項目と「総合的運動」等の体操の体系は、その後三橋の名で出された論文の内容とほとんど一致しているので、これらは三橋の考えとみなせるという。この論に依拠し、以後この5項目の内容は三橋の考えとみなして論を進める。(大熊廣明「三橋喜久雄の体育論(Ⅲ)」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第26巻、1984年、p.100.)
- 26) 永井道明・三橋喜久雄共著『新体操教授要目の組織的批判』廣文堂、1926年、pp.40-43.
- 27) 同上書、p.40.
- 28) 同上書、pp.32-33.
- 29) 同上書、p.45.
- 30) 同上書、p.112.
- 31) 同上書、pp.102-110、pp.116-122.
- 32) 同上書、p.45.
- 33) 同上書、pp.94-96.
- 34) 同上書、p.41.
- 35) 畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930年、7月1日、p.108.
- 36) 同上書、p.109.
- 37) 同上書、pp.110-121.
- 38) 三橋喜久雄は、文部省の命を受けて1922年9月から1924年までの約3年間、欧米の体育事情を視察して帰国し、帰国後、1925年6月から東京高等師範学校教授の職を辞し、成城学園教授となった。『現代の学校体操』は、著者によると、「従来実行シテ来タモノニ手近イ一部ノ教材ノ實際的要領ヲ載セ」た書物とされる。そして、掲載された「材料ハ、欧米諸国ノ何処カノモノヲ其ノ採探ツタモノモアルシ、欧米ノモノニ多少ノ改修ヲ加ヘタモ

ノモアルシ、又全ク私ノ創作ニカカルモノモアル」という。引用は、三橋喜久雄『現代の学校体操』モナス、1925年、序、p.2.による。三橋喜久雄の経歴及び体操論については、次の文献を参照した。大熊廣明「三橋喜久雄の体育論（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第22巻第2号、第24巻、第26巻、1980年、1982年、1984年。

39) 畑東一郎「成城に於ける体操の教材」『教育問題研究・全人』第48号、1930年、7月

1日、pp.117-119. 三橋喜久雄『現代の学校体操』モナス、1925年、p.47、p.50、p.149、p.153.

40) 三橋喜久雄、同上。

41) また、「総合運動」ではなく、「下肢の練習」に「駈歩足踏」が、「跳躍練習」に「駈歩足踏」と「駈歩」が配当されていることは、畑の第2の視点と一致した運動構成がなされていることを示している。三橋喜久雄、同上書、p.7、pp.157-159. 参照。